

# 序 章

形容詞は修飾語として、物事の性質や状態を表わす観念語である。国立国語研究所報告13などによると（注1）形容詞の語数は約五千余りと測され、「例解国語辞典」に収録された四万余語の中では、形容詞の語数は約1.5%の六百語を占め、「岩波国語辞典」の五万七千余語の中では、約1.2%の七百語を占める。これらの数多くの形容詞は何を言い表わし、何を修飾するかによって、いろいろに分類される。その中で、また、一つの形容詞についても、幾多の用法がある。中国語の母語話者にとって、もっとも難しく、理解できない点は、イ形容詞の「連用形ク+動詞」——いわゆる副詞的な用法——なのである。次の例文を見よう、

- 五月の雲が真綿のように白く伸びて行くのに、私は私の魂を遠くにフッ飛ばして……（林芙美子『放浪記』p 236）
- 綸子は殆ど汚れていず、目に痛いほど白く光っていた。（有吉佐和子『墨』p 97）

このような文を正しく解釈するには、どのようにすれば自分の母語の干渉を受けず、その日本語にぴったりした意味が取れるのであろうか、教育者にとっても、学習者にとっても大きな障碍であらう。これは両言語の構文上の違いに起因すると考えられる一方、言語、そもそも発想の違いや文化環境にも関係があると思われる。

筆者は拙稿で日本語教育の立場から、この形容詞の『副詞的な用法』について、対照言語学の方法を用いて、両言語の相違点をさぐり出し、更に明らかにしたいと考えている。

中・日両語の対照比較を行なうに当り、まず、第一章で日本語の形容詞、中国語の形容詞について、分析し、まとめることにする。本論文の論点の根拠や依拠する学説等は、それぞれ、第一章で説明批評を加えると同時に第二章では、日本語の形容詞の分類（西尾寅弥・1972）に従って、「程度」、「並立」、「内容」、「結果」、「感情形容詞について」の五つの項目を立てて、中国語との比較を試みる。最後に、比較の結果を検討し、「まとめ」として、とりあげたい。

日本語については、朝日新聞朝刊（1982.1～12）、小説・料理の本から集めたおよそ九百の実例（拙稿に記載した例文はおよそ百例ほど）を中心とし、西尾寅弥（1972）

（注2）の形容詞の分類に基き、分析し、それに対応する中国語との比較を行なう。

中国語については、朱徳熙（1956）（注3）の形容詞の分類を基にして、他の諸研究を参照し、更に、日本語の形容詞との比較をする際の裏付けとして、中国語の形容詞を概括する。

本論文の対象は「～ク＋動詞」という形の表現であるが、その内、「～ク・ない」およびその異形は論旨が多岐に渡り、煩瑣になる恐れがあるため、本研究の論考の対象からはずすことにする。

- a. しかし、御蔵島の中で、カツオドリを天下一の美味と確信している者も決して少なくない。（『海暗』p.38）

まず、a. は日本語の文法では、形容詞の否定形（連用形＋ない）と認められている。中国語では、形容詞「少」の前に否定を表わす副詞「不」をおいて、「不少」とし、「少なくない」という意味を表わす。不好（よくない）、不美（美しくない）、不新（新しくない）、不大（大きくない）などのように、否定を表わす場合、日本語の形容詞と中国語の形容詞とは、その形が、

表 1.

日 本 語 形容詞の連用形ク+ない	中 国 語 不+形容詞(注4)
----------------------	--------------------

というようにほとんど固定している。

また、本論文のテーマのように、日本語の形容詞の「連用形+動詞」、又は、中国語で「状語」(注5)と呼ぶ「形容詞+動詞」という用法を共に『副詞的な用法』と呼ぶことには、批判があるかもしれない。例えば、中国語では「形容詞+動詞」の場合、形容詞はほとんど動詞の修飾—つまり次の例文b.のように、動作の度合を表わすからである。

b. 重重的打了一下。(強くなぐった。)

ところで、

c. 齷齪的喝茶

c'. 喝茶齷齪的茶(濃いお茶を一杯飲む。)

という意味で、形容詞「齷齪的」は名詞「茶」の「濃さ」を強調するため、動詞の前において、「状語」の形を取るわけである。この場合の形容詞は動作態(注6)を修飾し

ていないので、動作の程度を表わすことができない。つまり、中国語では、動作の程度を表わす場合は、すべて「形容詞+動詞」の形を取るが、この「形容詞+動詞」の状語としての意味用法の例外は、例cのように名詞を強調的に修飾する場合である。中国語においては、このような場合、形容詞と動詞との結びつきはかなり制限的であるが、本論文の目的が日本語の「~ク+動詞」を中国語の母語話者が理解できるようにすることにあるので、これらの表現も論考の対象とすることにする。

日本語の形容詞では、「連用形+動詞」は単なる動作の修飾ではない。西尾(1972)の分類のように、程度性を持つうえに、「結果」を表わす意味用法もある。それ故、

d. 激しく泣く

d'. その泣き方が激しい

のように、dからd'に変形しうる。形容詞は確かに、動作の度合も表わす。このようなものを「程度」の表現と認める。その他のものは、文中で表わす意味用法によって、「内容」、「並立」、「結果」、「感情形容詞について」の四項目に分けられよう。これらに「程度」を加えた五項目を第二章「中日両語の対照比較」で扱うこととする。